

石丸 つる(立野) 碓 フミエ(大野)

この分教場も時代の流れに沿って、昭和四年度よりは廃校となった。したがって、明治二十二年に開設以来、この年まで満四十年の歴史があり、ここで勉強した児童数も千名を超えている。この分校最後の担任教師は既に故人の村山ユキ先生で、最後の児童には下古賀の蒲原国雄・鍛冶屋の徳久タヨ子等がいる。

この村の公民館は若宮さんの社殿に続いて、床の間あり広縁付きの明るい建物である。これは本村出身故木下文次(陸軍中将)の隠居部屋(佐賀市愛敬島)を譲り受けたものである。この公民館と社殿を活用して、村の諸行事や婦人会・青年団の活動がなされたのである。特に婦人は東与賀村でも戦前・戦中・戦後を通じて屈指の模範支部であった。故山口コト会長を中心に会員一同は相協力して、共同栽園作業・托鉢・遺家族慰問の外、農繁期における共同炊事や託児所に懸命の努力を続けた。しかも山口会長は幼児や農村民のために自宅を開放して、庭中や小屋を提供し炊事や保全と集会や遊戯の場としたという―その遺蹟は今も残されている。これらの婦人会活動の記録は、日誌として珍しくも数冊も現存しており、別記「東与賀村婦人会の結成」の項に当上町支部を代表に記載している。

また上町は酪農の村としても東与賀町における先進地である。当時この村の故御厨兼吾を中心に実久・立野・今町等の酪農家が合計四〇頭から五〇頭近くの乳牛を飼育していた。これ等が共同して、御厨兼吾の自宅前の空地を借用し工事費四〇万円を投じ本村では初めての「共同集乳所」を建設している。

## 六 下 古 賀

下古賀は上古賀の直ぐ南部に位置し、東は上町に西は田中に相近接している。昔から下古賀と上古賀および田中とは関係が深く、この三村に姻戚関係も多いことから、村の成立も相前後してではなにか。上古賀八幡神社の境内にある大神宮碑の側面に、蒲原治兵衛・徳久善蔵・徳久源之允等下古賀在住の姓名が刻まれているがその事情が推測される。その事は郷村帳にも「田中村の上古賀からの移住によってできた干拓村と見られる」と述べてある。

この下古賀は、明治十年頃より昭和八年に至る約六十年間にわたり、わが東与賀村創世時代の役場所在地である。往時はわが村の政治・産業・文化発展の中心地として、中枢機関たる村役場所在地として、活動し貢献した村落である。その役場は現在居住している石丸辰一の家屋であるが既に改造されており、今に残るのは当時の石の門柱および石垣等で当時の遺跡としては、由緒もあり永久に残すに価値あるものと思われる。その門柱に長年月の間掲げられた因縁深い木製の村役場標札が残っているが、往時を偲ぶに充分である。

この由緒ある土地であるために小邑に過ぎないが昔からこの下古賀に人物が輩出している。故江口元太郎は、理学博士で海軍大学の教授をつとめ特に潜水艦や電気器具の発明に貢献した。その従弟の故江口倉市は海軍大佐・故森川仁四郎は東与賀村第八代村長を務め、故福田与一は元助役、収入役を永年にわたり勤務、故徳久萬太

郎も村会議員や農地委員の長老として活躍した。最近では故南川清一剣道七段（九十歳で没）がいた。大正の初期以来実に六十数年にわたり剣道一途に、現職を退いても自宅の小屋や庭先を武道場として、後輩の指南と指導に精進した。

下古賀における従来の戸数は四十二戸、明治四十年の頃は三十戸内外であったが漸次に増加した。それに加えて近年町営住宅がこの地区に建設され、昭和五十三年に二十四世帯（二棟建）が五十四年にも更に一棟が完成して、人口も一挙に一四〇名の増加となった。この住宅に住む人の条件としては、元から東与賀在住者に関係ある人で町内の因縁関係者が多い。かくて現在の世帯数は従前の二倍を超えて八八世帯にふくれ上がった。居住者の職業も変動して、サービス業が最高で二〇、次いで建設業一八、その次に農家が一四となり、その他卸小売・公務員・運輸通信・製造業等となっている。

この団地居住者では、公務員はじめ会社・工場等の勤務者が多く、自家用車やバスで佐賀市内外へ通勤している。各棟毎に班長三名を任命し自治組織のもとに明るく健全な団地運営がなされている。この団地運営によって純朴平穏な東与賀の農村にも、若い人たちによる新風が吹き込まれつつあることは喜びにたえない。

下古賀村落における新旧住民の融和と親善のためには、なんとしても邑の氏神様でありも一つは公民館（集会所）である。お宮はこの村のほぼ中央に在り、さっぱりとした石造りの祠で船津のお宮から分祀されたものとの風

説がある。年記は不明であるが、神仏混交時代のものではないか。表の鳥居は明治二十六年改築したと明記されている。

このお宮の東側に最新式ともいふべき集会所が建設された。これは昭和五十三年度に工事費総額一三九〇万円の巨費を投じて建築された。正式の名称は「町営住宅下古賀団地集会所」で、前記の町営住宅建設の一環として完成されたものである。この集会所で地区集会をはじめ、老人クラブ・婦人会・父兄会の外、農家の生産組合や女性グループ（大正会・昭和会）等の勉強会・子供クラブの活動等、幅広く利用され活用されている。

村落の事業としてはお宮と集会所を中心に和やかに楽しく、次のことが行われている。大般若経は毎年二月十一日（建国記念日）当番の家で開催する。祇園は八月一日、大祭と小祭は十月十七日と十一月二十五日に二組に分かれて施行する。川神祭は五月五日の男の節句であるが、一カ里と南小路と北小路の三班に分かれて行う。こも藁舟を作り堀に流して子供の水難予防と河川に対する感謝を捧げるのである。お供日は十月祭りとして、赤飯祭りは当番の番帳さん宅で盛大に挙行する。かくて時代は移り世の中は変わっていくが、農村の麗しい伝統行事は毎年毎年引き継がれ受け継がれて、現在にもなお生きているのである。

## 町 七 今 町

今町は東与賀町の東部を流れる八田江に沿って栄えた町で、東は川を隔てて川副町広江と相對し、北は船津に



町 営 住 宅 団 地